複合的象徴としての聖母マリア

W. B. イェイツ『葦間の風』(1899 年)における英国デカダンスとアイルランドの異教的想像力の交錯

岡田咲

はじめに

19 世紀末のロンドンで青年時代の多くを過ごしたアイルランド詩人 W. B. イェイツは、自らの美的判断のもとで聖母マリアを描いた。従来、彼の聖母表象は政治的価値観と結びつけて論じられる傾向にあったが (Cullingford 56) 、本発表では初期詩集 *The Wind Among the Reeds* (1899) に収められた聖母主題詩のうちの 3 篇 "The Travail of Passion", "Hanrahan Speaks the Lovers of His Songs in Coming Days", "Hanrahan Laments Because of His Wanderings" に着目し、イェイツが英国デカダンスとアイルランド文芸復興における聖母マリアの表象の系譜を受容しつつ、両者から逸脱する要素を付加し、独自の重要性を持つ聖母像を構築したことを明らかにした。

１．イェイツと 19 世紀末英国・アイルランド文学における聖母表象

19 世紀末の英国デカダンス詩人は、カトリシズムを宗教的帰依の対象としてではなく、デカダン文学の本拠地であるフランスなどの諸外国に由来する異国情緒溢れるモチーフとして扱う傾向にあった。その代表的なモチーフがカトリック教会で重視されている聖母信仰や儀式であり、正統的カトリシズムに則った描写を行った。ライマーズ・クラブを通じて彼らと交流したイェイツも同様にこの表象に惹かれていた (Lockered, Kindle edition)。

ただし、イェイツにとってのカトリックとは単なる異国情緒の表れのみならず、彼から見たアイルランドらしさの象徴でもあった。彼は、農村部に残るカトリックと非キリスト教的フォークロアの混淆に着目し、これをアイルランドの根底にあるケルトの文化的伝統の名残と見なしてアイルランド文芸復興を先導した。こうした非正統的カトリシズムやフォークロアへの関心の背景には、カトリック住民による民族主義運動の台頭により、プロテスタントの中流階級の地位低下への危機感があったと思われる (Regan 27)。そのため、聖母を描く際にも、イェイツは正統的な表象を避け、フォークロアと混淆した非正統的な聖母表象を好んだのである。

２．"The Travail of Passion"に見られる非正統的な聖母の表象

"The Travail of Passion"は、女性の官能性を強調することでデカダンス的カトリシズムの範疇から逸脱した作品だ。初出は英国デカダンス詩人との繋がりが強い雑誌 *The Savoy* で、詩形はフランス・デカダン詩でも用いられたアレクサンドランを基調としており、 詩形や出典においてデカダンスとの強いつながりがあると言えよう。従来、本作品は同じくデカダンス文学との結びつきが強いマグダラのマリア、特に彼女のイエスへの献身の場面に依拠すると考えられてきたが(McDonald 415-417)、筆者はそこに聖母を含む三人のマリアが重なっていると考える。本作品がキリストの十字架の道行と磔刑の場面に重点を置いて描写している点や、ヨハネによる福音書に特有の語彙 ("The hyssop-heavy sponge" and "Kidron stream" in "Travail" line 5)を用いていることがその証左となろう。

その一方で、イェイツは聖母の伝統的イメージを転覆させようとも試みている。例えば最終行 "Lilies of death-pale hope, roses of passionate dream" ("Travail" lines 6-8) では、薔薇と百合という聖母のアトリビュートを官能的で女性美を強調した、髪をほどく描写に用いている。さらにタイトルにイブへの罰である産みの苦しみを含意する "Travail"を冠することで、苦しみなくイエスを生んだとされる聖母の逸話を覆している。このようにイェイツは、デカダンスの枠組みを利用しつつ、正統的な表象を反転させた非正統的な聖母像を提示している。

３．ハンラハン主題作品群におけるフォークロア由来の聖母表象

"Hanrahan Speaks to the Lovers of His Songs in Coming Days"もまたデカダンス的カトリックの文脈を背景に聖母を作中で描いているが、こちらにはアイリッシュ・フォークロアに根差した要素も見られる。 "The Travail of Passion" と同様、詩形はフランス・デカダン詩を思い起こさせるアレクサンドランとなっている。また、カトリックの教会に特徴的な構造や、カトリックの儀式に使用される没薬と乳香について言及されており、カトリックの外面的・形式的特徴に着目するデカダンス的傾向が見られる。ただし、イェイツのこの詩の語り手である 18 世紀アイルランドの放浪詩人ハンラハンが想像する聖母は、単にカトリックの信仰を描く道具立てとなっているばかりではない。本作品で聖母はアイルランド方言を用いつつ "Maurya of the wounded heart" ("Hanrahan Speaks" line 6)と呼ばれている。この呼称は正統的カトリシズムにおける "Our Lady of Sorrows"もしくは "Mater Dolorosa"と同義のものだろうが、正式な呼称ではなく方言や本来語が用いられていることで素朴かつ土着的な信仰との結びつきを導入している。

一方で、本作品にはプロテスタント的背景を持つイェイツのカトリシズムへの偏見も見られる。聖母が直接死

者を救済し得るという描写は、ローマ・カトリックは聖母の権能を拡大解釈しているために聖母を救世主に類する存在と見なしているというプロテスタントのカトリシズムへの誤解を内面化したものとも捉えられる(McDonald 414)。1890 年代当時のイェイツは既に伝統宗教に対する懐疑心を有していたうえにカトリックの急進的な政治信条に危機感を持っていたが、農村部のカトリック信徒に対してはまた異なる考えを持っており、反カトリック的な姿勢がここに表れたとも一概には言い難い。従って、本作品にはイェイツ自身の宗教上の固定観念が表出していると同時に、デカダンス的カトリックとアイリッシュ・フォークロアが混淆した聖母が描かれていると言えよう。

The Wind Among the Reeds には同じくハンラハンを語り手としつつも、彼が救済を願った聖母よりもさらにフォークロア的要素が明確に反映されている聖母が登場する作品 “Hanrahan Laments Because of His Wanderings”も収められている。特に作品冒頭の “O where is our Mother of Peace / Nodding her purple hood?” (“Hanrahan Laments”, lines 1-2) という呼びかけは、カトリックの聖母のみならずアイルランドの守護聖人のひとりであるキルデアの聖ブリジッド、そして女神ブリジッドをも想起させる。そもそも、女神ブリジッドへの信仰からアイルランドの守護聖人でもあり一般にアイルランドの聖母マリアとも呼ばれる聖ブリジッドへの信仰が派生したことは、19 世紀末当時すでに知られていたが、ここでは、カトリシズムにおける聖母の呼称そのままである “our Mother of Peace” を使用しつつも、聖母を象徴する青ではなくケルトの女神ブリジッドが纏うとされていた “purple hood” を描写することで、カトリックとフォークロアの混淆を示している。

その一方で、この聖母は語り手に対して無関心なファム・ファタールとしても描かれており、デカダンス的描写と結びつけられてもいる。特に *The Wind Among the Reeds* に収める際に追加された 5 - 8 行目では “the death-pale deer” (“Hanrahan Laments” line 5)に踏み荒らされることを望む心情が語られるが、当該箇所に関するイェイツ自注では、この鹿のイメージは男性に追われることを望む女性を象徴するものとして定義されており、まさしく 5 - 8 行目はつれない美女との破滅的な恋に心を捕らわれている状態を描いている (cf. *WATR* 92-94)。ハンラハンが語る “Mother of Peace”は、非キリスト教的想像力の産物とデカダンス的なファム・ファタール像が入り混じった存在であり、その呼称こそ正統的カトリシズムから引用しつつも、その実態は聖母から遠く隔たった存在となっているのだ。

結び

以上のように、イェイツは *The Wind Among the Reeds* において、英国デカダンスとアイルランド文芸復興という 19 世紀末英国・アイルランドの文学的潮流を取り込みつつ、独自の聖母像を構築した。彼の聖母はアイルランド民族主義などの政治的象徴として利用されたばかりではない。むしろ、カトリックや聖母信仰に美的な要素を見出して作中に描いた英国デカダンス詩の系譜、そしてフォークロアと結合することで非キリスト教的な側面も併せ持つようになったアイリッシュ・フォークロアへの着目、このふたつを取り込んだうえでイェイツの美学に即して変容させられた存在である。イェイツ作品における聖母を表象の系譜という観点から読み直すことで、同時代の美学的潮流の結節点かつ特異点として位置づけなおすことができるだろう。

引用文献

Cullingford, Elizabeth. *Gender and History in Yeats's Love Poetry*. Cambridge UP, 1993.

Lockered, Martin. *Decadent Catholicism and the Making of Modernism*. Bloomsbury Academic, 2020.

Regan, Stephen. “The Fin de Siècle, 1885-1897.” *W. B. Yeats in Context*, edited by David Holdeman and Ben Levitas, Cambridge UP, 2010, pp. 25-34.

Yeats, William Butler. *The Poems of W. B. Yeats, Volume Two: 1890–1898*. Edited by Peter McDonald, Routledge, 2021.

———. *The Wind Among the Reeds*. John Lane, 1899. *Internet Archive*, https://archive.org/details/windamongreeds00yeat/mode/1up.

注：「W. B. イェイツ『葦間の風』の聖母表象：英国デカダンスとアイルランド文芸復興の交錯と発展」というタイトルで発表を行いました。